〔課程-2〕

審査の結果の要旨

氏名　船越　明子

本研究は、地域精神保健の領域で注目されているひきこもり青年への援助活動において、重要な役割を担っている親が抱える困難感を明らかにすることを目的に、ひきこもり青年を抱える親の子どもに対する心理・態度の変容のプロセスを質的研究の手法を用いて明らかにするとともに、ひきこもり青年を抱える親の困難感を定量的に測定する尺度の開発を試みたものであり、下記の結果を得ている。

１．理論的サンプリングにより選出された 6 施設の公的または民間の親への支援活動に参加しているひきこもり青年の親 18 名と親への支援提供者 3 名を対象に、グループまたは個人面接による半構造化インタビューを実施した。インタビュー内容は、逐語録をもとに Grounded Theory Approach における継続的比較分析法を用いて質的に分析した。その結果、ひきこもり青年の親の子どもに対する心理・態度は、≪何がなんだかわからない≫段階から、≪子どもの状況を知る≫ ≪子どものつらさを理解する≫≪ありのままの子どもを受け入れる≫≪人生に新しい価値を見出す≫の 5 段階のプロセスを経ることが明らかとなった。また、親の変容を促進するサポートとして、プロセスの初期には、『情報提供』『精神医学的アプローチ』『自助グループ』、後期には『認知療法的アプローチ』『問題解決型アプローチ』『共感的支持的アプローチ』『夫婦カウンセリング』が抽出された。

２．先行研究およびインタビュー調査の結果をもとに 42 項目の「ひきこもり青年を抱える家族の困難感尺度(案)」を作成し，ひきこもり青年の親 176 名を対象に尺度の信頼性と妥当性を検討した。探索的因子分析により「夫婦間の協力」「ひきこもり青年に対する心的葛藤」「社会資源の活用」の 3 因子 18 項目が抽出された。Cronbach's α 係数は 0.858 と高い信頼性が得られた。3 因子構造について検証的因子分析による妥当性の検討を行った結果、モデル適合度の基準を十分満たすには至らなかったが、1 因子構造と比較するとより高い適合度であった。基準関連妥当性について、本尺度の合計得点は、子どもの問題行動の数が多く、活動の程度が狭く、家族に対して拒否的であることと性の相関、親の QOL(WHO/QO L)とは負の相関、抑うつ度(CES-D)とは正の相関を示した。以上の結果から、3 因子 18 項目の『ひきこもり青年を抱える家族困難感尺度』は

一定の信頼性と妥当性を有することが確認された。

３．ひきこもり青年を抱える 55 組の夫婦を対象に『ひきこもり青年を抱える家族困難感尺度』、QOL(WHO/QOL)、抑うつ度(CES-D)、家族支援の利用状況について、t 検定および分散分析を用いて父母間を比較した。過去一年間に親が利用したひきこもりに関する支援の利用数は、統計的に有意に母親よりも父親が少なかった。「夫婦間の協力」に関する困難は、ひきこもり青年との続柄と利用したサービス数との間で統計的に有意傾向を示す交互作用がみられた。また、父母別に階層的重回帰分析を用いて、困難感に影響する要因を検討した結果、父母ともに父親の家族支援の利用数が多いことが「夫婦間の協力」に関する困難が少ないことと統計的に有意な関連を有することが示された。

以上、本論文はひきこもり青年を抱える親の困難感を定性的視点と定量的視点から明らかにした。ひきこもり青年を抱える親の心理・態度の変容のプロセスおよび親の困難感に影響を与える要因の父母別の特徴は、これまでの研究では言及されておらず、ひきこもり青年を抱える家族に対する効果的な支援の実施に貢献できる新しい知見と考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。